オンライン授業の実際と学習者への意識調査
—UOW カレッジ香港での調査報告—
Online Class and Students' Survey
-A report at UOW College Hong Kong-

村上　仁
UOW カレッジ香港

要旨

2020 年初頭に拡大した新型コロナウイルス(Covid-19)の感染により、教育現場においても様々な措置が取られた。オンライン授業はその一つであり、筆者の勤務する大学においても双方向型のオンライン授業による対応が求められた。限られた準備期間で学期のほとんどがオンライン授業に変更された関係で、授業の進め方、課題の内容・出し方、評価方法など、あらゆる面でこれまでに経験したことのない形で担当コースに取り組まねばならなくなった。

本稿では、筆者が行なった日本語のオンライン授業（主に文法科目）について報告するとともに、学期末に学生に行った意識調査の結果も提示したい。1 学期を終えた段階での自己反省、また意識調査の結果から、今後オンライン授業を行う上での参考、改善も示していきたい。

キーワード：オンライン授業、双方向型、意識調査

オンライン授業の実際と学習者への意識調査
—UOW カレッジ香港での調査報告—

村上　仁
UOW カレッジ香港

１．はじめに

2020 年 1 月下旬、ちょうど旧正月を迎える頃に、香港でも中国の武漢を中心とする地域で新種のウイルス感染が広がっているという報道を耳にするようになっていた。やがて香港でもその感染者が確認されると、様々な機関においてもその対応に迫られることとなった。香港教育局は 1 月 31 日のプレスリリースで、幼稚園から小中学校（香港では中学校が 6 年間）などすべての学校を早くとも 3 月 2 日まで休校とする旨を発表した[1]。それを受けて、筆者の勤務する大学でも本来 1 週間であった旧正月休みを 2 週間に延長し、2 月 10 日からオンラインで授業を再開するという決定がなされた。延長された旧正月休みの後半の 1 週間は各教員の準備期間に充てられ、双方向型のリアルタイム授業をするためのワークショップも開かれた。事情が事情であるとは言え、対面授業の内容を 1 週間で完全にオンラインに移行するのは容易なことではない。Brinkley-Etzkorn（2020）は、オンライン授業のための研修に参加した教員への調査から、オンライン授業を始めるにあたって期待されることとして、教授能力の向上、授業に必要な新たなテクノロジー知識の習得、学習者に対する利益の提供を挙げているが[2]、通常そのためには一定期間の研修に参加しなければならず、各教員とも学びながら教えていくという感覚が強かった。

本学では 2 年制の副学士課程と 2019 年 9 月に始まった 4 年制の学士課程が混在しているが、それぞれの開講の背景上、前者と後者で別々の学習管理システム（Learning Management System: LMS）を用いている。日本語の授業はどちらにも提供されているため、副学士課程では Canvas、また学士課程では Moodle という LMS を介して授業を進めていくこととなる。ワークショップが行われた時点では、本学の Canvas には Conferences というビデオ会議ツールが組み込まれていたため、その使い方と、学士課程の LMS で採用していた CISCO の Webex というビデオ会議ツールの使い方を学んだ。ただ、その段階では Conferences の接続状況などに問題が見られたため、日本語教員間の話し合いで、日本語の授業では副学士課程でも Webex を用いる

---

1 The Government of the Hong Kong Special Administrative Region, https://www.info.gov.hk/gia/general/202001/31/P2020013100693.htm?fontSize=1_（参照　2020 年 8 月 18 日）

2 Brinkley-Etzkorn (2020) p.25

ことが決められた[3]。ワークショップ後、授業再開の直前に Canvas に Zoom も採用されたので、副学士課程ではそちらを利用することも可能になったが、筆者の授業においては、Webex に統一した[4]。

本稿では、そのような背景で始まったオンライン授業について、授業の進め方、課題や評価方法などについて報告する。また、学期末に行った学生に対するオンライン授業についての意識調査の結果も合わせて報告したい。

２．担当授業について

まず筆者が担当している科目について簡単に説明しておきたい。オンライン授業が行われたのは大学のカレンダーで言うと後期にあたる。後期（1 月中旬から 4 月下旬までの、旧正月休暇などを除いた 13 週間）は副学士課程 1 年生と 2 年生の日本語文法科目、1 年生の文化関連科目、2 年生の卒業プロジェクト（グループ指導）、さらに学士課程 1 年生の日本語科目を担当したが、本稿ではその中の日本語科目に絞って述べていきたい。いずれも 2 時間のレクチャーと 1 時間のチュートリアルという組み合わせで週に 3 時間の履修となる。科目によってはレクチャーとチュートリアルで複数の教員が担当することもある。例えば上述の 2 年生文法科目に関しては、筆者はレクチャーを 1 グループ担当したのみである。

副学士課程では日本語の授業は主に文法を扱う科目と会話練習を扱う科目で分かれているため、文法科目では基本的にレクチャーで語彙や文型の導入と練習、チュートリアルでその復習や小テストなどを行っている。また、担当した学士 1 年生の日本語では、文法・会話で分かれていないため、レクチャーで文型導入や練習、チュートリアルでその復習の他に会話練習なども取り入れるようにしている。

当初はオンライン授業はそれほど長引くこともないのではないかという予測のもと、担当教員間で相談の上、レクチャーは時間割通りのライブ配信をし、チュートリアルではワークシートなどを LMS 上にアップロードし、模範解答なども提供し、自主学習という形式を採った。実は前期の後半 3 週間も香港で激化していた社会活動の影響で同じようにキャンパスでの授業ができなくなり、その当時は双方向型授業へ移行するだけの時間もなかったために、レクチャー内容を LMS にアップロードして

---

[3] Webex は Moodle に組み込まれている形ではなかったため、教員の Meeting ID を学生に連絡することで副学士の学生もアクセスできた。逆に Conferences や Zoom は LMS に組み込まれているため、その科目の受講生でない学士課程の学生はアクセスすることはできなかった。

[4] これは単に、副学士で Zoom、学士で Webex と、筆者がいずれも使用経験のない別々のツールを用いることの負担を軽くするためであった。

自主学習させる方法をとっていた。筆者の文法科目では講義内容をまとめたものを音声ファイルにし、それをレクチャー資料を見ながら聴く、という形での自主学習にし、チュートリアルはワークシートを自分で行なってその後模範解答で答えあわせという形にした。その経験から、レクチャーはリアルタイム配信に変更するものの、チュートリアルは前期と同じ形で対応できると感じていたのである。ところが香港での感染状況が好転する様子がなかなか見られなかったため、オンライン授業３週目からチュートリアルも全て双方向型へと移行した。尚、授業の配信に関しては、時間割に組まれた教室から行うことも自分のオフィスや自宅などから行うことも可能であったが、筆者は基本的には教室から配信を行った。全教室にウェブカメラなどが設置されたが、場所によっては PC 自体の速度に問題があったりしたため、自分のノートパソコンを教室に持ち込んで配信することもあった。

３．授業の進め方

3.1 レクチャー

ここでは実際のオンライン授業の進め方について見ていきたい。まず２時間のレクチャーだが、元々が大人数のグループを相手にした講義形式の授業ということで、ある意味オンラインに移行してもそれほど影響が大きくないのではないかと考えられる。筆者が扱う授業では、年によっても異なるが、だいたい 50～70 人が受講する。通常の対面授業のパターンとしては、まず前週の学習内容の復習、教科書の新出単語の確認（発音・アクセント、意味、例文など）、その後新出文型ごとに説明、練習をする、という形である。教科書は『大家的日本語』（『みんなの日本語』台湾版）を使用しているが、課ごとに練習問題等を含めたレクチャーノートを作り、LMS にアップロードしたものを学生は印刷して持ってくることになっている（最近はノートパソコンやタブレットを持ち込む学生も多い）。

オンラインに移行してからも、基本的な授業の流れは維持したいと考えた。つまりは学生が学習事項を理解し、使えるようになることを目指したということである。まず、前課の復習は授業開始後にパワーポイントで問題を映し、その場でしばらく時間を与えて解かせた上で答えあわせを行なった。

それから教科書を用いて新出単語の導入をする。対面授業では単語ごとにコーラスさせているが、その部分は省き、教員が一通り単語を読んで行き発音・アクセントの確認をした後で、レクチャーノートに入っている例文を順に見ていく。読み上げる時は特にはっきりとゆっくり読むことを心がけた。これは言うまでもなく教室で直に聞くことができない状況に配慮したものである。漢字の書き方などで学生の注意を引く必要がある場合は、Webex の Annotate 機能を使ってシェアスクリーン上に直接書き込んだり、教室だとカメラに映るホワイトボードに書き込んで見せたりした。

その後本題とも言える文型導入と練習に移る。こちらも対面授業とほぼ同じように進めていく。レクチャーノートやパワーポイントスライドをシェアスクリーンで示しながら解説、例文の提示・読み上げを行い、レクチャーノートに入れてある練習問題をさせる。質問がある場合は、マイクを使って直接聞くか、チャット機能で質問を書き込むかさせるが、授業中にマイクで質問するのは抵抗があるのか、ほとんどの学生がチャット機能を利用している。対面授業でも休憩時間を利用して質問しに来る学生がほとんどなので同じような状況と言えるだろう。授業を進めながらチャットに質問が入った場合はそれを拾い上げる形で答えるようにした。これは個人的な印象だが、オンライン授業になってからの方が質問が多くなった感じがあり、チャット機能の気軽さがそこに影響しているとも考えられる。また、そうした印象は同僚からも聞いたり報告を見かけたりもした[5]ので、よく見られる傾向なのかもしれない。

対面授業との違いでいちばん感じたのはやはり学生の反応である。通常であれば学生の顔がそこにあるので、例えば練習問題をさせる場合でもどのタイミングで答えあわせに進むかなどがわかりやすい。しかしながらオンラインの場合は学生の様子が確認できないことが多く[6]、タイミングを計るのに苦慮した。そのため、こちらから「そろそろいいですか。」などと問いかけることで学生にチャットで反応させその様子を見て進めるようにしていた。

また、対面形式のレクチャーでは教室が広く学生との距離もあるので、学生を一人一人指名して答えさせることなどはあまりしていないが、オンライン授業においては練習問題の答えあわせなどで積極的に学生を指名しマイクで答えさせた。これはパソコンやタブレット、スマホの画面越しに授業を受けている学生にある程度の緊張感を持たせることと、オンラインになったために減少した学生とのコミュニケーションを少しでも増やし、日本語練習の機会を与えることを目的としたものだった。

3.2 チュートリアル

１時間のチュートリアルのそもそもの目的は、レクチャーの学習内容を確認し、その定着練習をすることである。通常は冒頭に５分間の単語テストをし、語彙の定着を促すようにしているが、オンライン移行後はその部分を省いて行った。まず教員側で前回のおさらいとして簡単に学習内容を確認する。その際に動詞の活用を考えさせ

---

5 「毎日新聞」 2020 年 6 月 7 日

6 Webex にはバーチャル背景の機能が実装されていないため学生側のビデオをオンにするかは強制しなかった。これは香港の住宅事情があまり良くないため自室や自宅を映したくないと希望する学生が多いためである。ただ筆者がこれを執筆している 2020 年 8 月時点では Webex にもその機能が追加されたようである。

たり、例文を作らせたりして、なるべく学生の発話機会を作るように心がけた。メインとなるのは前週のレクチャーで学んだ文型などを使った練習問題をすることであるが、オンライン授業では事前にそのワークシートを LMS にアップロードし、学生はあらかじめそのワークシートを終えた状態で授業に出席するように指示をした。チュートリアルは 1 クラス 25 名前後で行うので、ワークシートの答えあわせなどでも学生を順に指名し答えさせるようにした。尚、ワークシートはワードファイルをシェアスクリーンで映し出し、学生が答えた後に教員が答えをタイプし学生に示す方法を採ったが、これも教室授業ではビジュアライザーなどで見せたりしているのでほぼ同様のことができたと思う。学生によっては耳で聞くだけでは自分の間違いに気づかないこともあるため通常時からそうしている。

一通りワークシートが終わったところで学生からの質問タイムを設けた。これも通常授業では、授業が終わった後に質問する学生が多かったが、質問内容を共有することで他の学生にも有益になるかもしれないと考えての措置である。やはりレクチャーと同じように、チャット機能を利用して質問してくる学生が多かったように思う。

オンライン授業では、学生は基本的に一人でコンピューター画面やスマホ画面に向かい合っているため、集中力の持続は普段以上に難しいと思われる。教員側からも学生それぞれを見ることができるわけではないので参加度を測ることはほとんどできない。そういった意味で積極的にランダムに学生を指名するのはある程度の効果が期待できるのかもしれない。

４．課題と評価方法

通常授業とオンライン授業では、課題の設定や提出方法、また評価においても全てを同じように行うことはできない。オンライン授業を進めるにあたって、いちばん気になったのはこの点だった。オンラインに移行してもそれぞれの科目で設定する学習到達度 (Course Intended Learning Outcomes: CILOs) が変わるわけではないので、どのようにそこに到達させるか、どのようにそれを測るか、ということを考えなければならないためである。例えば「初級語彙の習得」が CILOs に含まれるのであれば、単語テストを行う、などの方法でその到達度を測ることになる。しかしオンラインになると、「テスト」という手段が公正にその判断に使えるかという疑問点が残る。中間テストや試験などでも同様のことが考えられ、実際に学部からもなるべく試験などの方法は用いないようにという指示があった。

筆者が担当する副学士 1 年生の文法科目を例にとると、通常の成績には単語テスト、中間テスト、宿題、作文、期末試験などが項目として含まれる。そのうちの単語テスト、中間テスト、期末試験に関してはそのままでは行えないため、別の方法に変えた上で学生に連絡することになった。

まず単語テストついては、前述のように通常チュートリアルの時間に行うものだが、それをなくし、代わりに単語の宿題という形のオンライン課題を設けた。これは各課の新出単語の中から教員が 10 個程度選び、それぞれの語を使った文を作らせるというものである。CILOs の一つが基本語彙を使えるようになる、という類のものだったので、そのような課題とした。それを毎週 LMS 上にアップロードして提出することとなる。ただ、始めてみて気付いたことだが、効率的なフィードバックをするには適していなかったように思う。通常の単語テスト形式であれば採点して返却し模範解答を示すことができるが、自由作文のような形式になったことと、オンラインでの提出であることから、全ての間違いを直して返却するのは非現実的であった。LMS 上に提出されたものにはそれぞれコメントが付けられるので主な間違いについてはコメントしたり、間違えやすいものに関してはレクチャー時に取り上げて説明したりできたのだが、それ以外の細かい間違いについては学生の自主性に任せるしかなかった。そういった意味で進度の遅い学生には十分なフィードバックができなかったというのは反省点だと思う。

中間テストや期末試験に関しては、時間を設定したオンラインタスクに変更した。科目を履修する学生が指定された時間に LMS にアクセスすると課題が表示されるように設定し、中間テストでは 50 分、期末試験では 2 時間の制限時間内にタスクを仕上げてアップロードする形である。タスクの内容としては、例えば夏休みに日本へ旅行に行くと想定し、どこで何をしたいかを自由に述べさせる。その際に指定文型「～たい」「～て、～て」などを必ず使うといった条件を設け、手書きさせてその画像をアップロードさせるというような方法を採った。オンラインで行うため、一般的なテストで用いるような助詞を答えさせたり動詞の活用を問うたりする問題は現実的でない。やはり、教科書やノートを見るだろうという前提で、しかもそれぞれの学生が別々のものを考えられるようなタスクを設定する必要があったためそのような形にした。

それ以外の宿題プリントなどの提出物は、教室で提出していたものを LMS にアップロードさせるぐらいで、基本的には同様のことが行えた。ただ、単語の宿題でもそうだったようにフィードバックに困難があったので、LMS のディスカッション機能を利用して、関連する課のトピックに質問を加えることができるようにした。例えば「15 課の質問」というスレッドを作り、その下に自分の質問を書き込む形である。グループによっても多少の差があったが、全体的には質問トピックはあまり利用されなかった。メールで質問を送ってくるケースが多かったように思われる。しかしディスカッション機能だと授業時のチャットと同じように科目全体で共有できるというメリットがあるので、もう少し利用の徹底をすればよかったというのが反省点である。

課題提出もオンラインになったことで、技術的な問題も多少見られた。時間を設定したタスクなどでは接続状態や速度の関係か、期限時間内に提出ボタンを押したのにアップロードされなかった、といった学生が数名いた。事前に余裕を持って提出するように伝えてはあったのだが、やはりそうした場合の対応も必要だと感じた。対策としては締め切り時間の 10 分後ぐらいまでシステム上はアップロード可能な状態に設定しておく（学生には締め切り時間以降の提出は減点と伝えておく）などの方法がいいかもしれない。

５．オンライン授業についての意識調査

ここまで見てきたように、後期授業のほとんどをオンラインモードで行った。完全なオンライン授業は筆者にとって初めてのことであったし、ほとんどの学生にとってもそうだったと考えられるので、学期終了時に簡単なアンケート調査を行なった。ここではその結果をまとめてみたい。

アンケート調査は Google Forms で作成し、副学士及び学士課程で日本語を履修している学生(1 年生から 3 年生)にそのリンクを送付して答えてもらう方法を採った。設問はすべて英語で表記したが、いくつかの質問を除いては学生が受けたオンライン授業一般（つまり日本語以外も）について聞いた。230 名ほどの学生のうち 161 名の回答があった。内訳は 1 年生が 54%、2 年生 37%、３年生 9%程度であったが、全体の比率もほぼ同じなので学年による回答率のばらつきはなかったと考えられる。

まず、オンライン授業に慣れたかどうかを聞いたところ、約 94%が「慣れた」と回答した。アンケートを行った時点ではオンライン授業に移行してから 10 週間ほど経過していたのでほとんどの学生にとってはその形式も定着していたようである。

次に学生自身がオンライン授業ではどのような態度で向かっているか、その積極性を聞いてみた（表１）。その結果 34%ほどが通常授業より積極的になったと回答した一方で 25%ほどは逆に消極的になったとしている。教員側の印象では、オンラインの方がチャット機能などでの質問の頻度も高く、課題提出率も上がっていると感じていたので、積極的になったという意識がもっと高いかと思ったのだが、実際には一部の学生だけだったということなのかもしれない。また、消極的になったと感じている学生が思ったよりも多かった。やはり画面を通しての授業だと、そこに自分が参加しているという意識が弱くなるということなのだろうか。もちろん通常授業でも消極的な学生はいるが、オンラインで他の学生も周りにいないという状況でさらにその傾向が強くなるということはあるかもしれない。今後はなるべく学生側のカメラもオンにさせたりすると参加意識は変わって来るのかもしれない。

表１：オンライン授業での態度

態度	人数	%
とても消極的	11	6.8
少し消極的	31	19.3
普通	64	39.8
少し積極的	44	27.3
とても積極的	11	6.8

また、関連する質問としてチャット機能やマイクを使って質問したりディスカッションに参加したりしているかを聞いてみた（表２）。「非常によく」または「よく」すると答えたのは 22%ほどで、逆に「あまり」「全然」しないというのが 39%もいた。やはり教員側が受けていた印象は一部の積極的な学生に限られていたということなのかもしれない。これも当然ながら、通常授業での意識と比較しているわけではないので、この結果だけを見て決めつけることはできないが（普段から一切質問したりしない学生もいるので）、チャット機能など気軽に参加できるツールは教員側からもっと利用を促したほうがいいのだろう。オンラインでも教室での授業と同じように、あるいはそれ以上に自分が参加できるという意識を学生に持ってもらうことは大切だと思われる。

表２：チャット機能やマイクを使って授業に参加しているか

	人数	%
全然しない	21	13.0
あまりしない	42	26.1
普通	62	38.5
よくする	28	17.4
とてもよくする	8	5.0

オンライン授業のメリットを複数回答で聞いてみたところ（表３）、特に目立ったのが「毎日キャンパスへ行かなくてもいい」「どこからでも授業が受けられる」という項目で、それぞれ約 84%、74%の学生が選んでいた。「授業内容がよく見える/聞こえる」というのは 30%ほど見られたが、その一方で「十分に練習できる」「もっと積極的になれる」「もっと集中できる」といった項目はそれぞれ 19%、15%、13%ほどと少なかった。学生の意識では、オンライン授業はアクセス面での利便性は高いと感じているが、学習活動としての効果についてはあまり高く評価していないようである。

表３：オンライン授業の良い点（複数回答可）

	人数	%
どこからでも受けられる	119	73.9
毎日通学しなくていい	135	83.9
授業内容がよく見える・聞こえる	48	29.8
もっと集中できる	21	13.0
もっと積極的になれる	25	15.5
十分に練習できる	31	19.3
その他	3	1.8

反対にオンライン授業のデメリットとしては（表４）、「インターネット接続などの問題が生じる」「先生やクラスメートに会えない」「あまり集中できない」などの項目を選んだ学生が多く、それぞれ 78%、60%、52%ほどだった。「質問をするのが難しい」というのが 40%ほどいたほか、「あまり積極的になれない」「あまり練習できない」というのがそれぞれ 26%ほど見られた。アクセス面での便利さは感じているものの、技術的な問題や一人で受けなければならないという学習環境上の問題が明らかになった。また、教員側からするとオンラインの方がチャット機能などで質問

しやすいのではないかと思っていたことが実はそうでもないということもわかる。やはり上述のように、そうした機能を使えば気軽に質問できるということをしっかり伝えていく必要がありそうである。

表４：オンライン授業の悪い点（複数回答可）

	人数	%
友達や先生に会えない	96	59.6
質問しにくい	65	40.4
接続の問題などが起こる	125	77.6
あまり集中できない	83	51.6
あまり積極的になれない	43	26.7
あまり練習できない	41	25.5
その他	1	0.6

学生が、日本語という言語の授業とそれ以外の科目でオンライン学習の効果についてどのように思っているかも聞いて見たが（表５）、オンライン授業全般についても日本語の授業についても大きな比較は見られなかった。どちらもオンライン授業に効果を見出している学生の方がやや多いものの、否定的な意見も一定数あり、必ずしもオンライン授業の効果を評価するには至らなかった。同様にオンライン授業一般と日本語のオンライン授業それぞれを５段階の点数評価で比較してみたが（表６）、日本語の方がやや高い結果になったものの、やはり違いを示唆できるほどではなかった。

表５：オンライン学習の効果

	オンライン授業一般		日本語オンライン授業	
	人数	%	人数	%
全然効果的でない	7	4.3	6	3.7
あまり効果的でない	26	16.1	25	15.5
普通	77	47.8	73	45.3
まあまあ効果的	44	27.3	51	31.7
とても効果的	7	4.3	6	3.7

表６：オンライン授業に対する評価

	オンライン授業一般		日本語オンライン授業	
	人数	%	人数	%
１　とても悪い	3	1.9	5	3.1
２　悪い	17	10.6	15	9.3
３　普通	71	44.1	57	35.4
４　良い	61	37.9	69	42.9
５　とても良い	9	5.6	15	9.3

最後にオンライン授業に関して提案などがあるかどうかを自由回答形式で聞いてみたところ、いくつかの具体的な点が聞かれた。まずは技術的な面が挙げられる。「接続の問題が多かった」「Webex は問題が多すぎる。Conferences の方がいい」など、授業を受けるための根本となるインターネット環境、ソフトウェア等に改善の余地があることがわかった。ただ、あくまでも筆者個人の印象だが、急遽オンライン授業に移行しなければならなかったという状況を考えると、香港は比較的恵まれた環境にあるのではないかと思う。例えば、端末がなくて授業が受けられないとかインターネットのデータ量が足りなくて受けられない、といった声は一切聞かなかったし、教員側の不具合で授業に支障が生じたのは 10 週間の授業で 1 度だけだった（その時は急遽 Zoom を使って行なったが、その連絡や準備で時間のロスがあった）。もちろんこちら側が大学の割と安定した環境で授業を配信しているので学生個々の環境を把握しているわけではないが、全体としてみればスムーズに移行できたという感じはある。ソフトウェアに関して言えば、本稿を執筆している 2020 年 8 月時点で Moodle[7] に Zoom も組み込まれているので、今後は対処しやすくなると考えられる。

また授業に関する提案として、「授業を録画して欲しい」「学生が対面授業とオンライン授業を選べるようにして欲しい」「もっとマイク・カメラを使って発話させて欲しい」「朝の授業や夜の授業はオンラインでもいい」などの声が寄せられた。録画に関しては、筆者の授業ではレクチャーは全て録画し、後日そのリンクを LMS に貼り付けるということをしていた。これは当初オンラインでは対面授業のようにできないため少しでもその溝を埋めたいと考えたからである。学生がもう一度聞いて確認したいという学習意欲があるならば、それに応えるべきだろうという気持ちもあった。

[7] 2020 年度（2020 年 8 月下旬開講）は副学士課程も学士課程も同じ LMS の Moodle を利用することになっている。

ただ、これは教員間でも様々な意見があり、「そもそも授業は１回のものだし、録画があるからと授業をサボる学生がいると真面目に出席している学生には不公平だ」といった考え方もあるようだ。個人的には、授業の内容によるかもしれないが、語学学習のように反復に効果があるものはその機会を与えるのは悪いことではないと感じている。対面授業とオンライン授業の所謂ハイブリッド授業の提案もあったが、非常に興味深いことであるし、実際今後その可能性はますます高まっていくだろうと思われる。これももちろん授業内容によるとは思うが、例えばレクチャー形式の授業はオンラインで行い、ディスカッションや演習を目的としたチュートリアルは対面で行う、などの形は、特に民間、私立の教育機関などにとっては現実的な問題になってくるのではないだろうか。「もっと発話させて欲しい」という意見からは、やはり対面授業では感じられない孤独感、ストレスといったものが見て取れる。実際にオンライン授業を進める中で感じていたこととして、学生の発言・練習機会の減少が大きかった。藤本（2019b）でも指摘されているが、対面授業では当たり前のように行っているコーラスやペアワーク・グループワークがオンラインになるとできなかったり、できたとしても何か物足りなかったりというもどかしさがあった。この点は今後特に気をつけていきたい点である。

今回、簡単な意識調査を行った限りでは、オンライン授業についてそれほど否定的という結果にはならなかったが、学習効果という点については長期的に見ていく必要もあるだろう。Guest 他（2018）の意識調査でも言われるように、オンライン授業初期の段階では技術面での問題などが起こりやすく、結果としてオンライン授業全体が否定的に見られてしまうこともある[8]。また授業内容やクラスサイズなどの要因でも印象は異なる[9]ことから、オンライン授業を取り入れるにあたっては、それに適した形を見極めながら行っていく必要もあるだろう。

６．今後に向けて

ここまで、新型コロナ感染の拡大による突然のオンライン授業への移行を強いられたことから、その中でどのように授業を進めてきたか、課題や評価の方法についても触れながら述べるとともに、学生のオンライン授業に対する意識調査についても報告した。

---

[8] Guest 他 (2018) p.1091
[9] 同上 p.1085

先にも述べたが、僅か 1 週間ほどの準備期間で完全オンライン授業に移行できたのは香港の ICT 環境による恩恵と言えるだろう。大学生のスマホ所持率はほぼ 100%と言ってよく、コロナ禍以前から授業時に QR コードを読み込ませてそのリンクから問題をさせることで出席も確認する、といったことも行なっていた。また土地の狭さと住宅環境からほとんどの学生が実家暮らしのため、インターネット環境においても Wi-Fi が整っているなど、接続が困難ということもあまりない。藤本（2019a）によるインタビュー分析では、インターネット接続の問題など、授業内容自体に関連のない部分で授業活動や教員のメンタリティーに影響があると報告されている。授業の受け手である学生側でその準備ができていることは重要である。日本国内ではその点での難しさもあるようで、文部科学省の調査では 2020 年 6 月 1 日の時点でオンライン授業を行っている大学や短大は全体の 6 割ほどだったという[10]。非常事態宣言が解除された後で一部通常授業を再開した大学もあったとはいえ、感染第 2 波の懸念がある中でオンライン授業の割合がそれほど高くなかったというのには、やはり ICT 環境によるものもあったのではないだろうか。また、オンライン授業と言ってもリアルタイムで授業を配信する双方向型もあれば、録画された授業を学生が好きな時に見る録画配信型などもあり、例えば昭和女子大学ではオンライン授業開始後 3 週間で双方向型授業は約 6 割だったと言う[11]。そのようなことから考えても、すぐに双方向型授業に移行できたのは恵まれていると言えよう。

香港では 2020 年 7 月中旬以降、一度落ち着いていた新型コロナの域内感染者数が再上昇し始め（現地メディアは「第３波」としている）、9 月に始まる新学年に向けてどの教育機関でもその対応に追われている。筆者の所属機関では新学期もオンライン授業で開講することが既に決定されている[12]。また科目ごとにオンラインと対面が混在するハイブリッド授業を行う大学もあるようである。それに加え、2019 年に活発化した市民運動、デモ活動が再燃しないとも言い切れないため、コロナ禍で双方向型授業への移行を経験していたことはある意味で有益だったと

---

[10] 「毎日新聞」2020 年 6 月 7 日

[11] 「ICT 教育ニュース」2020 年 6 月 8 日　https://ict-enews.net/2020/06/08swu/ （参照　2020 年 8 月 21 日）

[12] （2020 年 12 月追記）本学では 2020 年 9 月から 12 月初旬までの前期も全てオンラインとなり、対面での試験などを別の課題提出やオンラインテストなどに振り替えてのカリキュラムになった。また、2021 年 1 月中旬からの後期授業も当面オンラインで行われることが確定しており、前期同様それに合わせたカリキュラムに変更することになっている。対面授業再開の見通しは現段階ではついていないが、再開されたとしてもキャンパス内人口を制限するために隔週登校（半分の学生が対面の週は残り半分がオンライン、翌週は逆という形）が提案されている。

捉えるべきで、今後はこの経験をどう活かしていくかが重要となるだろう。例えば、今回の意識調査ではなかったが、別の機会に学生から「いろいろな科目の課題が重なって大変だった」という意見を聞いた。これも準備期間が短かったことの弊害であると思うが、通常の試験やテストができなくなったために、それぞれの科目でその分を別の課題やタスクに替えて行うこととなった。しかしながら他教科（特に日本語以外）の教員と確認する時間も不十分であったことから、同時期にいくつかの提出期限が重なるということがあったようである。本学に限らず、日本でも同様の問題が生じているようだが[13]、今後は教員間の連携を効率的に進めていく必要があるだろう。

オンライン授業自体は新しいものではなく、低コストで多人数に同時に供給できる、などの利点から、幅広く利用されてきている。しかしながら、これまでは通学しての学習が難しくなるようなオーストラリアや中国大陸の大学などで取り入れることはあっても、香港のようにその必要性が限られる環境においてはなかなか普及もして来なかった。また、仮にオンライン授業を取り入れるとしても、大学人口から見ると人数的には少なく、成人教育や生涯学習向け講座などに限られることも多かったようである[14]。それが今回のように、短期間で、ほぼ世界的に広がったという背景を考えると、今後この分野での発展も急速に進むだろう。それに伴う技術の発達やツールの開発などでオンライン授業を行うための環境はますます整ってくると考えられる。その点に期待しつつ、オンラインという環境がどのように最大限効果的に学習につながるかをこれからも考えていきたい。

[13] 大学プレスセンター　2020 年 5 月 28 日　https://www.u-presscenter.jp/article/post-43747.html（参照　2020 年 8 月 21 日）

[14] Bao (2020) p.113

参考文献

藤本かおる（2019a）「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究–担当教師へのインタビューを中心に–」『JeLA 学会誌』, 19, 27-41

藤本かおる（2019b）「日本語のグループオンライン授業での教室活動に関する研究– 1 事例の教案分析を中心に–」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』, 20, 55-61

Bao, W. (2020). COVID-19 and online teaching in higher education: a case study of Peking University, *Hum Behav & Emerg Tech*, w, 113-115. https://doi.org/10.1002/hbe2.191 （参照　2020 年 8 月 29 日）

Brinkley-Etzkorn, K.E. (2020). The effects of training on instructor beliefs about and attitudes toward online teaching, *American Journal of Distance Education*, 34, 1, 19-35.

De Jong, P.G.M., Pickering, J.D., Hendriks, R.A., Swinnerton, B.J., Goshtasbpour, F. and Reinders, M.E.J. (2020). Twelve tips for integrating massive open online course content into classroom teaching, *Medical Teacher*, 42, 4, 393-397.

Guest, R., Rohde, N., Selvanathan, S. and Soesmanto, T. (2018). Student satisfaction and online teaching, *Assessment & Evaluation in Higher Education*, 43, 7, 1084-1093.

「オンライン発言活発化」、『毎日新聞』、2020 年 6 月 7 日、朝刊、p.3

「大学、遠隔授業のみ 6 割」、『毎日新聞』、2020 年 6 月 7 日、朝刊、p.3

「『課題多すぎ！』オンライン授業での学生の悲鳴を教員の連携やカリキュラム設計で解決––学生の立場で学びをデザイン、FD 効果も—桐蔭横浜大学」、大学プレスセンター、2020 年 5 月 28 日、https://www.u-presscenter.jp/article/post-43747.html （参照　2020 年 8 月 21 日）

「昭和女子大、オンライン授業 3 週間の調査でリアルタイム双方向型が約 6 割に」、ICT 教育ニュース、2020 年 6 月 8 日、https://ict-enews.net/2020/06/08swu/ （参照　2020 年 8 月 21 日）

“EDB announces class resumption on March 2 the earliest”, The Government of the Hong Kong Special Administrative Region,
https://www.info.gov.hk/gia/general/202001/31/P2020013100693.htm?fontSize=1
（参照　2020 年 8 月 18 日）